

無事、子どもの緊張が解けて、検査者との間にラポール（信頼関係）が築けた場合には、もちろん、検査結果は信頼に足るものと判断されることとなりますが、一方で、最初から女性の検査者だったらどうだったのだろうか？自分ではない検査者だったらどうだったのだろうか？という疑問は浮かびます。

このような事態に出会うと、やはり振る舞いとか経験とかという次元ではなく、「検査者」という存在自体が、検査にそれなりの影響を与えているのでは、と思えてしまいます。

余談ですが、全く逆の事態として無事に検査を実施し終えてから、「この子、男の人はだめなんですけど...？」とお母さんが首をかしげることもあります。筆者はわかりやすく男性的なキャラではないので、そのためかもしれませんが、無事に検査が実施できて嬉しいような、なんだか悲しいような、少々複雑な気持ちになることもあります。

「実はラットでも…」

先日、同志社大学で「赤ちゃん学概論」という授業のゲストスピーカーを務めさせて頂きました。同志社大学は「赤ちゃん学研究センター」という、国内でも他に類を見ないような赤ちゃん研究の拠点を備えているのですが、その赤ちゃん学研究センターの先生方が中心になって「赤ちゃん学」についてさまざまな視点から迫っていくのが、この「赤ちゃん学概論」です。講師も学生さんも多様な学域から集まっておられました。理工学部でロボットの研究をしている方から心理職を志す方まで、さまざまな観点から「赤ちゃん」に関心を寄せる人たちの中で

過ごす時間は、とても刺激的でした。

その中で、私の持ち時間は、実際に赤ちゃんに教室に来てもらい、検査の一部も用いながら赤ちゃんの発達をみる視点について、実演を交えて説明する、という内容でした。慣れない環境下で赤ちゃんに関わることに言い知れぬ緊張感があり、授業が終わった頃にはぐったりと疲れていました。

そんな私にある先生が質問をされました。実際の検査では、検査者の性別によって結果が変わったりするのかどうか？という質問でした。私は先ほど述べたように、全く影響がないとは言えないかもしれないが、一般論としてある程度慣れて検査が実施できれば、数値的な結果を左右するほどの影響はないと考えられている、と回答しました。

「実はラットでも、違うっていうんですね」。

聞くと、ラットの実験をする際でも、女性の研究者が実験を行う場合と男性の研究者が実験を行う場合とで、ラットのリラックスの程度が明らかに異なるということでした。「だから、気をつけて実験しないと、と思うんですね」と、つぶやいておられたのが、とても印象的でした。

一般論と一事例

それでも、基本的には子どもがある程度検査場面に適応することができれば、検査者によって、少なくとも数値的な検査結果には大きな差は生じないのであると考えています。ただ、それはあくまでも一般論としてです。ひょっとすると、あるタイプの子どもの対して、あるタイプの検査者が、思いがけず強い影響を与えてしまうケースもあるかもしれません。少なくとも、「検査者」

の影響があるかもしれない、という可能性については、心の片隅でも気に留めておく必要があるのではないのでしょうか。

検査間隔と練習効果

この「検査者」をめぐる問題と、ちょっと似ているかなと思うのが、「検査の間隔」に関することです。講習会などで時折頂く質問に、「K式はどれくらい間を空けて実施しないといけないのか？」というものがあります。この「検査の間隔」については、2つ考えるべきポイントがあると思います。

1つ目が、短期間での再検査が本当に必要なかどうか、という点です。検査を面白そうに受けてくれる子どもも確かにいますが、やはり検査が子どもに負担をかけているという意識は必要です。本当に、今その子どもの発達を評価するのに検査が必要なのか、代替の手段はないのか、子どもの利益に叶うのかを、まず考える必要があるでしょう。子どもの年齢(月齢)にもよりますが、発達状態が変化するには相応の時間を要しますし、そのペースは子どもによりまちまちです。さまざまな手続き上、「検査をとる必要があつて…」という事情があるのは理解できますが、大人側の事情で子どもに負担をかけているという側面は否定できないように思います。

そしてもう1つが、「練習効果」の問題です。昨日検査をした子どもに、もし今日も検査をしたとすれば、当然昨日した検査の内容を覚えているので、「練習」を積んだ状態になり、課題をうまく解くことができるかもしれません。これが「練習効果」です(実際翌日に実施したりしたら、げんなりしてむしろパフォーマンスは低下するかもしれ

ませんが)。他の検査では、この「練習効果」の影響をあらかじめ調べてあつて、「〇年以上期間を空ければ、練習効果は確認されない」と明示してあるものもあります。

ここで思うのが、先ほどの一般論の話です。一定期間を空ければ、練習効果が認められないというのは、明確な根拠があることです。つまり、一般的な傾向として、〇年以上間を空けた場合は検査結果に(統計的に有意なレベルの)練習効果はみられない、ということです。

一方で、相当の年月が経っていても、過去の検査のことを覚えている子どももいます。積木を提示しただけでまだ何も指示していないのに、「これって、こうするやつやろ？」と子どもが作ってしまった、という経験をしたことのある検査者も少なくないのではないかと思います。このような記憶が、数値的な結果にどの程度影響しているのかは、正直なところよくわかりません。余裕があることがプラスに働く場合もありそうですが、その分指示に意識が向きにくくなり、求められていることとずれてしまう場合もありそうです。

ただ、数値的な結果はどうあれ、過去の検査経験が、次の検査に何らかの影響を与えることがあることは、間違いないでしょう。「検査者」の影響を心に留めておくのと同じように、以前に実施した検査の影響についても、「〇年空けているから、影響は考えなくてよい」とは、安易に考えない方がよいのではないかと思います。